

自営業と非正規雇用からの退出後について雇用形態の比較

—2015年SSM調査データを用いて—

大阪大学

平尾一朗

1 目的

日本において1990年代から2000年代前半までは、自営業が減少し続ける一方、非正規雇用が増加し続けるという傾向があった。仲・前田(2014)は自営業の参入と失業率の関係を議論し、日本では失業率が上昇しても自営業者への参入が進まず、むしろ失業率の上昇は中小企業から自営業ホワイトカラーへの移動を抑制することを指摘している。また、多くの先行研究で自営業への参入と非正規雇用への参入について代替的な特性があることが指摘されている。しかし、自営業からの退出後と非正規雇用からの退出後について、正規雇用に就きやすいかどうかといったことはあまり検討されていない。もし、自営業と非正規雇用の参入において代替的な特徴があれば、自営業と非正規雇用は退出においても類似の特徴があるはずである。そこで本研究では自営業からの退出後と非正規雇用からの退出後の従業上の地位を対象に探索的に比較分析した。

2 方法

2015年SSM調査(社会階層と社会移動に関する全国調査)データを用いた。データはパーソン・ピリオッド・データに変換された。分析対象を男女の自営業経験者、男女の非正規雇用経験者とし、それぞれに離散時間ロジットモデルを適合させた。自営業と非正規雇用ともに、従業上の地位は変わらないが職種は変わりやすいため、従業上の地位の変化を退出とした。従属変数を自営業もしくは非正規雇用の退出後の正規雇用、自営業の場合は非正規雇用、非正規雇用の場合は自営業、無職とし、それぞれのなりやすさを検討した。独立変数は性別、年齢、出身階層(EGP階級図式)、本人学歴、退出1年前の産業分類、退出1年前の失業率、正規雇用経験年数、自営業経験年数、非正規雇用経験年数、婚姻状況、未成年の子どもがいる・いない、である。

3 結果

自営業と非正規雇用からの退出について類似点は、若年層の方が正規雇用に移動しやすい、女性は男性に比べ無職に移動しやすい、未成年の子どもがいれば女性は無職に移動しやすい、それぞれの経験年数は正規雇用の移動に効果を持たない、ということである。相違点は、女性の自営業者は正規雇用に移動しやすいが女性の非正規雇用は正規雇用に移動しにくい。自営業からの退出において正規雇用経験があったほうが正規雇用に移動しやすいが、非正規雇用からの退出ではその効果がない。そして、非正規雇用からの退出において自営業経験者は自営業を再び起業しやすいが、いっぽう、自営業からの退出においては非正規雇用経験があるからといって非正規雇用に移動しやすいわけではなかった。

4 結論

自営業からの退出と非正規雇用からの退出に類似点はあるが、自営業経験者は非正規雇用を経て自営業に移動しやすいが、非正規雇用経験があるからといって自営業に移動しやすいというわけではなく、そこに非対称性がある。

文献

仲修平・前田豊, 2014, 「日本における失業率の変動と自営業への参入」『理論と方法』29(2): 325-44.